芦高新聞

発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6の3

本校指定店
合資会社 芦屋写真室 撮影部 カメラ部
国鉄芦屋駅北出口前
電話芦屋㉒四七三六番

第二十四回記念祭を終えて

九月の二十八日から四日間にわたって行なわれた記念祭、一年間の学校生活のうちで、自治会員として最も大きく楽しい行事でしょう。鑑賞会・体育祭・文化祭、それぞれの形でクラブやクラスの団結の成果が発表されていました。また執行部の面々、実行委員の人たち、黙々と陰の力となって記念祭の成功のためにどんなに尽して下さったことでしょうか。こんな力の上に記念祭がやっと成り立っていることを思うと、お礼を言わずにはいられません。しかし、マンネリ化や他校からの介入・ところどころに見られた明らかな手落ち、デコレーションの是非など、さまざまな問題を残したようです。

そんなさまざまな思いのする記念祭を開幕祭から閉幕祭まで再びふり返ってみることにしましょう。

鑑賞会

九月二十八日、西宮市民会館に於て、高々と鳴り響き渡ったファンファーレと共に、「一瞬でもいいから、楽しいと感じられれば幸い——。」という会長の言葉で幕が切って落とされた第二十四回記念祭。全校生徒が一つ所に集まり、劇や音楽を楽しんだ。そこで出版部では、休憩時間を利用してインタビューをしてみた。

圧倒的に人気のあったのが落語「どれが一番よかったですか。」という問に対して、ほとんどの人が落語と答えた。落語という言葉が、堅苦しさ、むずかしさを、少しも感じさせなかった。やはり、おもしろく、なごやかな気分が皆を引きつけたのだろう。

次いで劇もなかなかの好評であった。「観客が、いらない所で笑っても一向に気にせず、一生懸命やっていた所がよい。」「考えさせられる劇であった。」と言う声も出ていた。

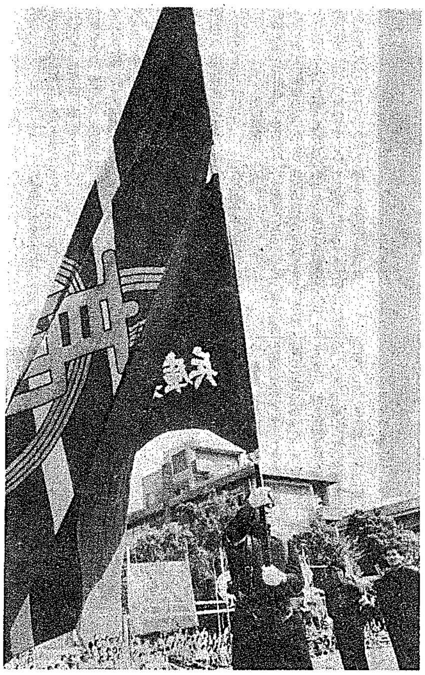
県下第二位を誇る合唱部。スピーチをした人が多少上がっていたせいか、思っている事が、余りうまく言えなかった様だったが、あの時の聞く側の態度は、あれでよかったのだろうか?。

吹奏楽も、大阪市音楽団に負けないぐらいのすばらしい演奏であってよかった。

「会場内の雰囲気は、どうでしたか。」と問うと、一年生は、上級生から、トイレットペーパーが飛んだりすると言う事を聞かされていたせいか、「思っていたより静かだった。」という声が多かった。事実、ヤジを飛ばす人も少なく、ざわめきも、演技が始まると次第に薄れていったようだ。しかし、一方では、熱心に鑑賞している人がいたのに対し、まわりの席を見回すと、あちらこちらで、スヤスヤと気持ちよさそうに眠っているのも見受けられた。

大阪市音楽団を招いての招待音楽会が続いて行なわれた。これはクラシックからポピュラーまで幅広く演奏され、どの人にも受けていた様だ。演奏技術の高度さ、ボリュームの大きさなど、魅力ある数々であった。

この様にして記念祭第一日目の鑑賞会は無事終了した訳だ、文化部への諸注意がなかったために、小さなトラブルもあったようだ。



体育祭

前日雨で心配された第24回体育祭だったが、29日の朝には、曇りとはいえ、薄日がさし、予定通りに行なわれた。そこでわが出版部は、合間を利用して、インタビューをした。執行部も今年は、去年の失敗もあり初めから体育祭の予行など、教育したらしい。インタビューで、圧倒的に多かったのが、デコレーションにおいての点である。去年よりよくなったにしろ幼稚、雑…という事。なるほど運動場の各クラス、クラスのデコレーションはこ一歩漫画という感じであった。しかし、めいめい力をあわせて、作ったものだということで、救われたように思う。しかし、汗と労力と、時間を多く費やしたデコレーションの前に、すわっているわりには、何となく応援の気力が、欠けているように思われる。各クラス、クラスの個性をもって応援したら、もっと体育祭が、盛り上がったのではないだろうか…という意見もあった。

とは言え、選手が、運動場で、転び、どろどろになっているのにもかかわらず走っているのを見ると自然に応援の声が、でてくる。これとデコレーションが、混ればこれ以上のすばらしい応援が、他にあるだろうか。なにしろ、体育祭が、つまらないか、楽しいかを決めるのは、その人自身の気持ちの持ち方しだいである。参加すれば参加するほど、楽しいものになるのでは、ないだろうか。

文化祭

三十日公演

講堂で行なわれた舞台の演技には、早くから多くの人がはいり、熱がこもっていた。

三十日は主にクラスでの劇やコーラスなどが演じられていたが、有志というだけあって、内容がなかなかユニークなものや熱心な練習の成果が出ていると感じさせられるものが多かった。何よりも良かったのは、出来は別としても、クラスとして団結していて一生懸命やっているということだ。やはり自ら進んで記念祭に参加することによって、記念祭の楽しみがわかってくるのではないだろうか。

一方、観客の方は、わりと態度がよく、気分を盛り上げるようなヤジは多少飛んだものの、その他不快なことはなかった。

一日公演

一日は日曜のためか、一般の人や生徒も多く来ていた。各演技のどれをとっても練習の成果が出ているものだった。しかし、演技と演技との間ではいってきた人たちが、がやがやとしていて、次の演技が始まってもしばらくの間は静まらなかったことは、見ている人にとっても不快だったし、演技者にとってもやりづらかったと思う。その上、後ろの方は見えにくいのか、席が余っているにもかかわらず立っている人が多数おり、これもざわつきの一原因だったかもしれない。係の人が気をつけるとか、幕を上げるのを少し待つとか、何かの工夫があっても良かったのではないだろうか。

展示（三十日・一日）

各クラス・クラブとも趣向をこらして個性的な展示が行なわれていた。最近のブームともいえる占いや、オバケ屋敷など、おもしろい着想でなかなかの人気を博していたようだった。しかし、専門的でむずかしいものは敬遠されていて、努力のあとも見られずに通り過ぎていたのは残念だった。

模擬店については『いつも通りのパン・ミルク・アイスクリーム・ジュースを売っているだけでつまらない。もっと華やかに色々なものを売ってほしい』という要求もあった。しかし、食べた後のゴミはほとんど散らかっておらず、なかなか良かった。

閉幕祭

好天に恵まれた四日間の記念祭も終わり、午後四時、閉幕祭が行なわれた。

恐らく、大部分の人々にとって閉幕祭が一番印象的であったのではないだろうか。

一番にぎわった最後の日を更に盛り上げるように炎は燃えた。点火の前に火が燃え出したりするミスもあったが、それがかえってみんなをリラックスさせてくれたようであった。

応援や、自治会歌に出席者は思いっきりのっている様であった。しかし、思ったより本校の生徒が少なく、四分の一ほどが他校の生徒であった。

次第に消えて行くファイアーの炎を見つめながら、我々の心の炎を更に燃やし続け、また、来年の記念祭の火が燃えるまで、また一年間、芦高生としての歩みを進めなければならないと思った。

きれいな夕やみであった。

反省会　於視聴覚室

十月五日の放課後、視聴覚室で記念祭の反省会が行なわれた。

☆鑑賞会

招待演技の反省について意見が多くでていた。大阪市音楽団が、出演したが、そのために公演を拒否されたクラブもあったようだ。それについて「県営より外部を優先するのはおかしい」という意見も多分にあった。それに対して、「鑑賞会は招待するのが目的で、あとのクラブは本校でさせる方が平等である。」という反論があった。

☆体育祭

体育祭を二日目に行ったために鑑賞会を最後まで聞けずに、体育祭の準備に回された者も多いようだ。しかしこれでは、あまりにも不公平な感じがするので「来年からは、行う日程についてもっと検討するべきだ。」という意見があった。次に、デコレーションについて賛否両論で、反対意見としては「全体的にテレビなどの影響により、マンガ化され堕落してきている。それに、広い西宮のグラウンドも使用できなかった。又、武庫高校とのトラブルの原因ともなった。」ということで、賛成意見としては「一年間のうちでクラスがまとまって何かを作るといったようなことは、デコレーションぐらいのものだから是非とも残しておこう。」というのがあった。

どちらにしても、それぞれの長所短所を備えており、まだまだはっきりと結論はでないようだ。

☆文化祭

（公演）会場整備について、活発な意見が発表されていた。演技と演技との間での一般生徒の入出場をうまく整備できなかったようだ。それに、合間の窓の開閉も不十分であった。特に問題だったのは、肝心の会場整備委員の集まりが、悪かったことだ。来年からはもっと人数を増やすと共に、委員としての責任を各自が果たすべきだ。そして、一人が何役も背負わされるような係の決め方は、やめるべきではないだろうか。

（展示）「準備期間が短かった。その上七時までしか残ることができない。」「何日か前から展示する部屋を使用させてほしい。」など、準備期間についての反省・意見が多かったが、それについては「七時までしか活動できないことは早くからわかっている。それなのになかなか取りかからない。そして後になってあわてている。そんなことなら早くかかればそれでいいんだ。」という声や「一年間期間があるのだから計画をたててきちんとすればよい。」という反論があった。又、出欠をとらないために出席が悪いことや他校からの介入があったこと、カンパの箱が置いてあったこと、などが問題となっていた。

☆印刷PR

校正の悪かったこと、原稿の集まりが悪かったこと、体育祭のぬき刷をすればよかったなどの反省・意見が出ていた。又、今年は受け付けで渡すプログラムが、文化祭の頃には不足してしまっていた。しかし、今年は去年よりも二千枚も枚数をふやしており、体育祭の時来られた人に渡したのが原因だったようだ。このため、やはり体育祭のぬき刷りは必要でこれを行なっておれば、枚数の不足を防げたという結論になった。

☆閉幕祭

マイクのコードが短かく、みんなをまとめにくかったことや、ラインを引いて、馬蹄型に全員を並んでもらえばよかったことなどが係の人から述べられていた。手落ちな点は「点火をする前から火がついていた」「歌集がなかった」「一年生は記念祭歌も教わっておらず、事前教育がなかった」などが上げられていた。又、根本的な意見として「ファイヤーは夜にしてこそきれいなもので昼間からやっても仕方がない」というのもあった。最後に、今年の閉幕祭は全般に無計画さが目立ったとしめくくられた。

裏表独語

近頃、生徒と教師との断絶という事が、世間一般で言われている。特に、高校生と教師間の問題は、我々に身近な事である上に、単に学校生活だけに留まらず、社会生活における、さまざまな傾向とも関連している。

一体、生徒は教師を、どのような目で見ているのであろうか。「人格的には信頼できないが、受験に関しては、一応信頼できる」「教科に自信があり、教え方に熱のある教師。」「テストの点だけがすべての様な顔をして、それだけで、生徒の値うちを決めつけてしまうような教師。」などのようである。

では、生徒の教師に対して心の中で描いている理想像とは、一体どのようなものであろう。小・中学校には、まだあった生徒と教師との間の親密感が、高校になると、感じられなくなり、冷淡さを感じるようになる。何となく「サラリーマン的な教師」という感じが、少しではあるが、感じられない訳でもない。これは、高校になると、義務教育過程をおえているのでもあるし、教師が生徒を放任し、自主的な行動に任せているせいもある。又、ホームルーム活動が小・中学校と比較すれば、少なくなり、教師を重要視しなくなったせいもあるであろう。そこで、生徒はやはり「自分たちの事をよく理解してくれて、相談しやすい先生、付き合える友達といった様な関係」を望んでいるようだ。

しかし一方、生徒の方に目を向けてみると、主体性の問題がひっかかる。口では偉そうに、あれやこれやと批判していても、実際はどうであろうか。又、「教師」に対する自己流の先入観に凝り固まり「教師が生徒に何を求めているか。」もよく考えずして、自分の決めた「教師像」でしか、教師を見ていないのではないだろうか。

二十四時間のうち四分の一は学校で先生と顔を合わせているのだから、教師と生徒との関係は、切っても切れないものである。双方ともが、相手の理想ばかりに走らず一度、自分の態度を見つめ直しても、よいのではないだろうか。

今年の記念祭をふり返って

今回の記念祭は、全般的に見れば、成功だったと言えよう。鑑賞会にせよ、文化祭の公演にせよ、去年のようにヤジや紙飛行機が飛びかうような事は行なわれなかったし、執行の記念祭への着手が比較的早かったために、去年に比べればスムーズな運営が行なわれたと言えるだろう。

だが、それにもかかわらず、もうひとつ迫力に欠けたような気がしてならない。何か表面的で白けた雰囲気がどこかに残っていたようで残念である。

毎年、記念祭の季節になると感じることは、執行委員と一般生徒の間にあるギャップである。執行委員だけが、記念祭、記念祭と追い回されているのに、一般生徒は意外に無関心である。

これは、記念祭が底辺である一般生徒から造られたものではなくどちらかと言えば、執行委員会からの押しつけによって造られている、と見てさしつかえないだろう。この現象は、記念祭の商業化とも言えるのではないだろうか。つまり、記念祭を企画し、提供する側（執行委員会）とそれを受けとる側（一般生徒）にわかれてきているように思える。これは、記念祭が、テレビの番組や、あるいはロックやポピュラーのコンサートなど似た性格を持ちつつあるという事であろう。つまり、我々がテレビのチャンネルを自分の好みで判断すると同じく、記念祭の受け手である一般生徒は、自分の趣味によって、記念祭に参加するかどうかを、決めようとする。自分の好みでないとなると、避けてしまおうとするのでは、ないだろうか。

この傾向は特に鑑賞会によく表われているように見える。現在の鑑賞会は、一般生徒が何を求めているか。という事よりも、招待公演のゲストのギャラや日程の都合などに、左右される事が多いようである。また、ブラバン、合唱など、毎年出演するものは、決まっている。一般生徒が参加するという要素はきわめて少ないと言えよう。

このような現象が起こるのは、記念祭が、全校単位という事にとらわれすぎて、全校生徒一人一人を残らず一つの企画に参加させようと、意識しすぎているからではなかろうか。学校行事とはいえ、鑑賞会のように、個人の好みが大きく影響してくるようなものは、今後は運営が、いよいよ困難になるであろうし又、わざわざ企画して、実行していくだけの内容の盛り上がりは望めないように思う。

そこで、これからの記念祭の方向として、大規模単一的な、企画から、小規模で、多様的な方向にもって行く事は、できないだろうか。

つまり、クラス、クラブ単位での展示に、より力を入れ、展示だけでなく、クラス単位の討論会であるとか、様々な外部団体から借りられる八ミリ映画などの、鑑賞会を設置するなど、小さなサークル単位での活動を、充実させるようにする訳である。もちろん、それらのサークルには、何らかの形での問題提起がなされるべきである。

この様な、サークル活動は、行事としては、それほど派手ではないので、表面的には記念祭らしい華やかさは、見られないだろう。しかし、小規模であるから故に現在の記念祭より、はるかに充実したものに、なり得る可能性があると思う。

もちろん、これは、あくまでもこれからの、記念祭に関する一つの提案である。実際に、企画運営していくには、様々の問題があるだろう。しかし、いずれにせよ、現在の記念祭は、一つの転期にきていると見て、さしつかえないだろう。いつまでも、今までの慣習に従って、記念祭を続ける事は無意味であろう。

出版部部長

何事も済んでしまってから言うのは、たやすい事なので、あまりくどくど言うまいと思っているがお詫び労々一つ二つ言わせてもらうと、まず、ズバリ言って、今年も例年の域を脱せなかったという事だ。最初から、今回だけでイメージチェンジできるとは考えていなかったけれども、もう少しアイデイア次第で何とかなったのではなかろうか？そう思えてならない。

記念祭は、自由を確立する場である。それはわかっているが、では一体具体的にどうすれば良いのか。それは今もってわからない。もちろん、僕も「これが、もしかしたら？」と、ハッとする時が記念祭中に幾度かあったが、それは時間が経つと、何となくうやむやになるような、ボーッとしたものだった。何か、非常に具体性を欠くもので、活字としては表わせそうにないし、また記念祭が終わってから幾日も経っていないし（この原稿を書いている時は）僕の頭の整理もできていないので、はっきりこうだ、という事は言えない。

最後に、今年の執行部の展示は内容はたいへん凝っていたのだが見学に時間がかかりすぎ、一部の方にしかお見せできなかった事をお詫びする。

自治会長　山本光孝

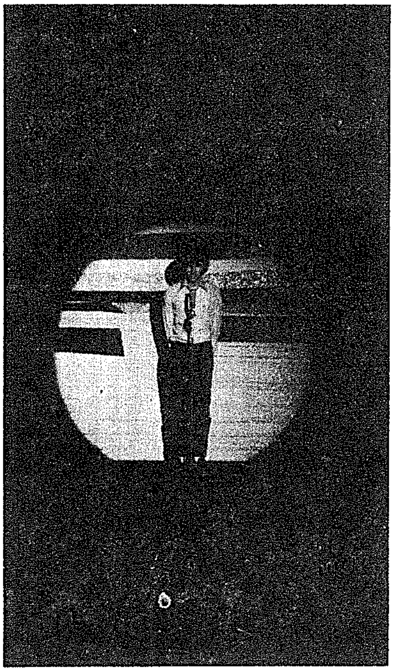
「あっけなく終わった記念祭」これが今年の記念祭の感想である。

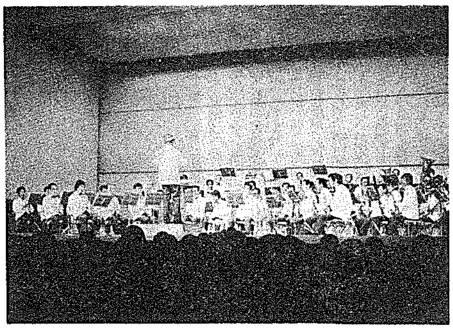
文化部にとって年に一度の統合発表の場としてはあまりにも寂しかった。クラブの活動状況は、とても活発になってきているのに昨年よりも低調であった。

その理由、それは残念なことながら現在の芦高文化部がそのまま表われたためだからかもしれない、なぜなら、今年は有志展示を極力押えたため娯楽的な物が全くなくクラブの展示が（昨年の様に付近の有志展示にかくされる事なく）そのまま我々の前に出たからではないか、きっとそうであろう。事実、長年研究をしてきてその結果を苦心して出したという物はほとんどなかった。そしてただ本を拡大、写した様な模造紙だとか、一・二カ月の研究の様なものが多かった。また展示の仕方についてもまだまだ工夫する所がたくさんある様であった。これが展示についてであるが、鑑賞会でのクラブの発表については、展示とはうって変わって、公演クラブは相当な進歩があった。長い間練習してきた物を精一杯出していた様である。そして聞き手である我々も一生懸命聞いていた。今後もこうあってほしいものである。文化部については以上である。

次に記念祭全体についてであるが、文化部が前に書いた状態だったために影響されてか、これもパッとしないものだった。「小じんまりとまとまっていた」と見ればそれで良いかもしれないが、もっと高校生らしい明るさがほしかった。とは言え、大した問題も起こらずまあまあの記念祭であった。

文化部長　桑江暢也





—放送部に物申す—

鑑賞会における出し物のひとつに、放送劇があった。内容も技術もかなりよかったけれど、どうして年に一度鑑賞会のステージでしか、出演しないのか。もともと放送劇はステージの上で演ずるものではあるまい。

なぜ、ふだんの昼休みなどに放送で流さないのか？

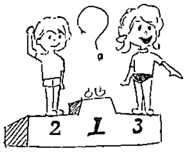
あの市民会館のステージに立ちたかったクラブは、出演したもの以外にもあったはずである。普段その技術を公開でき得る立場にある放送部は、どうしてステージを必要とするクラブに出演を譲ってもよかったのではないだろうか。

尼留君にインタビュー

—東南アジア遠征—

去る八月九日から十四日まで、本校生徒・尼留君は兵庫県代表として東南アジア遠征に行って来た。九日は伊丹空港から約十時間足らずで、バンコク・ドニアム空港に着陸し、タイ料理を食べ旅の疲れを取った。翌十日は、ショッピングなどで楽しみ、お昼より、ナショナルスタディアムで、タイユースと戦い、四対〇で敗れた。翌日はドンアム空港より香港空港。翌日十二日は、中文大学サッカー場で、中文大学と戦い一対二で勝った。また翌日、マカオに向かい、群力足、球隊という社会人チームと戦い二対一で惜しくも敗れた。しかし、兵庫県代表として選ばれた彼らに、ゴクロウさまと言おうではないか。

「外国の印象として？。」と聞いたら、「少々の見学であったけども、タイの街通りがきれいであった。」と…いうことでした。



原稿募集

ただ今出版部では芦笛に掲載する原稿を募集しています。学校生活への批判・詩・小説など何でも結構です。字数は四百字づめの原稿用紙何枚でも結構ですが匿名はお断りします。

又、芦笛の品位を極端に落とすものや、正当な論点に立っていないような特定の個人を中傷するものは御遠慮願います。

なお、紙面の都合で、掲載できない場合があるかもしれませんが御了承下さい。締切は十一月の中旬です。寄稿されたい方は、プレハブ校舎、五二三号室の出版部部室までお持ち下さい。

体育祭成績発表

左図が主な体育祭の結果です。かなりのメンバー変更があったようですが、ほとんどが本部まで届け出ていなかったので、少々のメンバーの違いがありますが、御了承下さい。

〔クラス別得点〕

学年	1位	2位	3位
1年	J 37	GE 36	
2年	B 52	I 36	A 35
3年	I 38	B 36	H 35

〔トラック競技結果〕

種目	200m 3年		200m 2年		200m 1年		100m 3年		100m 2年		100m 1年		クラスR 3年		クラスR 2年		クラスR 1年		運動部R	
性	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1位	I 小西	E 沢村	I 前田	B 山本	J 神足	J 植村	E 菱川	A 石谷	J 木村	C 田村	G 西川	E 中沢	F	E	H	B	B	C	サッカー	陸上
2位		A 本庄	G 浜田	D 山内	G 鷲崎	C 蒲田	F 岡田	E 鷲尾	B 萩原	A 片田	J 村瀬	D 利守	D	B	A	E	G	E	陸上	バスケット
3位	D 野本	C 大塚	B 細谷	C 松浦	D 奥田	B 二井林	H 池田	B 楠瀬	A 槌岡	B 米満	D 対川	F 田中	J	HIJ	I	D	E	D	硬野	バレー

最近に思うこと

近頃、気にかかる事がある。それは「政治に対して関心がない」というのを意外と耳にするからだ。場合によっては「政治はよくわからない」という言葉に代わる時もある。とにかく、その様な言動に対して疑問を感じないではいられない。我々は政治と関係せずに生きていけるだろうか？こちらでいくら政治について無関心であっても、あちらからは確実に影響を与えてくる。なぜなら、世界はこちらの思惑とは関係なく流動するからだ。日常における外部からの影響はあるが、ただそれを意識していないから、さも政治と自分が無関係だと思ってしまうのではないだろうか。次に「政治がよくわからない」という人に言いたい事がある。何かその人は勘違いしているのではないだろうか。初めからよくわかっているなら政治家になれる。そうではなくて最初に「考える」という事から始まるし、ずっとそれが根源である。政治について意見を言ってくれというと難しい事を言わなければならないという様な先入観があるのではないだろうか。だが政治に対する無関心さというものが果たして好きでそうなったか、というと疑問だ。現在の教育体制が考える力を奪っていってるのにも大きな問題がある。だからこそ考える力の残っている間に現在の教育、ひいては、田中内閣の本質を見抜かなくてはならない。（榊真輔）